

私は80歳の現役ソーシャルワーカー

一般社団法人 とまるソーシャルステーション理事 戸丸敦子

私はこの秋80歳の現役ソーシャルワーカーです。遙か昔、恩師仲村優一先生が「ソーシャルワーカーは、医師や弁護士がそうであるように、生涯ソーシャルワーカーですからネ」と仰せられ、長い間その言葉が気になっていましたが、55歳の時社会福祉士の資格を取得するや現実味を帯びてきました。70歳で大学を定年退職と同時に予め計画通り独立開業し、主に成年後見業務に従事しています。既に4人の被後見人の方が亡くなられ、ご家族の無い方の葬祭から納骨まで一人で厳粛な経験をさせて頂いています。未だ一般には法律家による「財産管理制度」と理解されているようですが、ソーシャルワークそのものとも言うべき「身上監護」こそが、成年後見制度の命であると思うにつけ、その一端を担わせて頂ける事はソーシャルワーカー冥利に尽きると感謝いたしております。

さて、私のソーシャルワーカー人生のきっかけとなったのは、多感な中高生時代を過ごしたミッションスクールで、米国人女性宣教師の方々の生きる姿勢に決定的な影響を受けた事にあります。師への憧れから宣教活動に同行し、果ては農村児童伝導の一端を受け持ったり、国立らい療養所や結核療養所、児童養護施設などの訪問に度々同行し、広く社会に目を向けるようになりました。将来は師の様に使命感に立った職業に就き、社会に役立つ人になろうとの思いが私の中で固まっていきました。

進学は迷わず福祉系を希望し、幸い日本社会事業大学（当時短大）で学ぶ事となりました。

大学卒業後は、地方公務員35年、大学教員15年（大学院非常勤を含め20年）勤務し、現場から教育機関へそして再び現場へと福祉専門職一筋に通す事が出来たのは、幸運この上も無い事で、一重に人と時の巡り合わせに恵まれたのだと唯感謝あるのみです。

最初の就職先は、大学からの推薦を受け内定通知を頂いた厚生省の出先機関をお断りして、第一志望の八幡市（現在北九州市）に致しました。青少年育成を標榜する市長が招聘したという気鋭の女医が課長を務める児童課に配属となり、「若い専門家」と皆から温かく迎えられ、面映ゆくもあり、期待に応えなければと鼓舞しました。与えられた仕事は、水上生活者の学童寮と謂うべき児童養護施設の指導員でした。当時、児童養護の文献とて無く何を指針にすべきか迷い、日本女子大学児童学科に編入（通信課程）し、児童の理解に努めました。実践と学びの並立に大変充実感を味わう日々でした。時を同じく、行政と総合病院小児科の共同研究「児童発達と環境に関する総合調査」計画が本格化し、行政側の担当を命ぜられ大学で教わった社会調査のノートを改めて開きました。1年後結果が纏まり勧めにより「教育と医学」学会で発表の初体験をしました。就任早々から尊い経験をさせて頂き、児童の福祉に益々興味が湧いてきた頃、福祉事務所の社会福祉主事（一般にケースワーカーとよばれる）に任ぜられました。従来ケースワーカーは男性のみの職場であったものを、女性として謂わばテストケースの異動でした。就任後研修もそこそこに、いき

なり多問題地区をしかも法定の2倍の160ケース持たされました。当時、炭鉱閉山を背景に生活保護獲得闘争が高まる中、行政は後手後手で全くお手上げの状態、ケースワーカーのバーンアウトが常態化していました。これが市民の生存権を守る最前線の現状かと悲しくなりましたが、兎も角自分で納得がいく様やるしかないと思い、受持ケースをすべて訪問して世帯の実態を把握の上分類して、訪問計画表を考案し実行しました。同調する仲間もでき勇気づけられました。やがて勉強会の有志を募り、朝日訴訟を始め八尾冷蔵庫死亡事件、岸・仲村論争など時の話題を取り上げケースワーカーの在り方を論じ合いました。更に、当時ケースワーカーは計算ワーカーと自嘲しつつ、厚生省の「保護の実施要領」を死守しているかに見えましたが、私は「世帯分離」の要件列举の中に受持ちケースの現実との矛盾を発見し、国に申入れたところ翌年から追加され自分の仕事に自信とソーシャルワーカーとしての誇りを感じました。他方不正受給ケースの発見をし穩便に済ませるようと指示する上司と対立することもありました。私は譲らずケースワーカーの命ともいふべきケース記録に残しました。4年後五市合併による指定都市となり、国の指導のもと「生活保護の適正化」を目的に新しい部局が設けられ、私も異動することになりました。主な任務は福祉事務所職員特にケースワーカーの研修です。研修によりモラルアップを図り、濫救漏救を失くし全国一の保護率60パーミリ（全国平均13パーミリ）から40パーミリにするというものです。手はじめは、国の委託を受けて「社会福祉主事資格認定講習会」を実施することでした。受諾申請書を一瞥した担当官は、国も呼べないような一流の講師陣をよくも揃えたものだとかき顔でした。種を明かせば仲村優一先生のご援助によるもので、恩師の有難さが身にしみた一瞬でした。4年が過ぎ新設の市職員研修所への異動内示を断り、希望通り児童相談所に勤務することになりました。待っていた任務は、「登校拒否問題担当の児童福祉司」でした。8年間に240人の相談に応じ、問題の個別性、多様性にたじろぎ解決へ向けて試行錯誤の日々でした。そんな中、公権力を有する立場を自覚し教育委員会や、中学校長と渡り合っ問題が解決出来た時、当事者に責任が果たせ心から安堵しました。2年ほど後「あの時は自殺も考えました。無事に高校へ合格しました」と合格発表日真っ先に親子で来所された時、児童福祉司冥利に尽きるとはこのことかと私の方が感激で胸が一杯になりました。児童福祉の第一線で働く醍醐味を感じるようになった或る日、突然、宗像町より「市制施行に伴い福祉行政の立上に力を貸して欲しい」と申出があり、既に宗像町に転居し愛着を感じていた矢先でしたのでお請けし、割愛人事で異動しました。市制施行までの3カ月間で福祉事務所が実施する福祉五法に関する事業の準備にあたることとなり、国の補助事業を極力拾い上げ規則や要綱の起案をしました。立上業務はスムーズにいきましたが、市制施行後福祉事務所指導監督の立場にあった私は職員の窓口対応にはハラハラし通しでした。従来の行政事務の感覚で人事配置がされ、ましてや福祉についての事前研修も無い儘でしたので無理からぬことでした。対人援助の経験も何も無い所に相談業務をどのように根づかせていけるのか悩みました。実は私も地縁血縁社会の縮図のような市役所の空気に初めは馴染めませんでした。あからさまな嫌がらせも受け決して平

坦ではありませんでした。しかし、年月とともに地域のことも分かり市内の人とのポジティブな関係性も生まれ居心地が良くなってきました。10年経って福祉行政も軌道に乗り仕事が面白くなってきた矢先に、今度は短期大学よりお招きをうけました。厚生省の薦めによる保母養成課程の新設に当たり社会福祉の専門教員が必要とのことでした。俄には去りがたく躊躇う私の脊を市長に押され決心しました。「人に招かれる時には行きなさい」の言葉とともに流された市長の涙が今も脳裏にあります。

短大では社会福祉概論と児童福祉を主に担当することとなりました。個室があたえられ自由な時間もあり、これまでとは異なる環境に有頂天になったのも束の間、行政の審議会委員や民間団体の役員就任依頼が次々あり、辞退することなくお請けし多忙を極める事となりましたが、周りに社会福祉への認識を広めまた自分の勉強と思えば苦にはなりません。その時期県社会福祉士会の立上に関わり初代会長を3期6年務めました。お陰で福祉の現場情報が入手でき、多方面の人とも知り合え貴重な資源となりました。

やがて大学文学部に人間福祉学科が設置されることとなり異動しました。主担当科目は、児童福祉論、福祉科教科教育法、社会福祉援助技術職場実習演習でした。ここで70歳定年となり、以後5年間非常勤として大学院で児童福祉特論を担当し児童虐待問題を共に研究し有意義な大学教員生活を終えました。

その後は冒頭に書きました通りです。ところで人が集まる所すべてにソーシャルワークがあると予て思っています。実はもう一つのライセンスである能楽シテ方の師範として30年間教室を主宰して来ました。初めからグループワークを心がけてきましたその所為か、メンバー間の葛藤も無く長続きしています。私にとっても心が開放され最早生活の一部となっています。これからもプロ成年後見人とアマチュア能楽師二つの舞台でソーシャルワーカー人生を送りたいと願っています。以上

なお日本ソーシャルワーカー協会へは1990年に入会いたしました。